

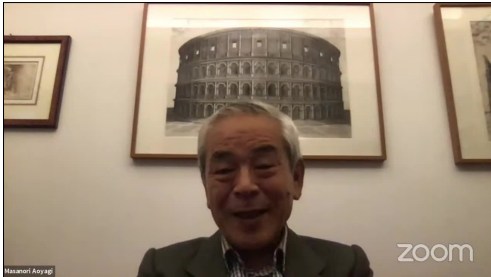
岩日タイムズ

発行者
岩瀬日本大学
高等学校
ソーシャルメディア部
海老澤 麻佑

コロナ禍でも邁進

文化を通して地域を知る

青柳正規さんオンライン取材会



新型コロナウイルスの影響で一年間延期された東京オリンピック・パラリンピックにもなう様々な文化事業に関わる内容を説明してくれた青柳さんは、東京五輪の1年間延期について「質実な大会を行うことにより、本来の大会に戻る事ができる。延期は大変なことだけれども、それでも大会を開こうという強い意志を

青柳さんの講演の様子
持った者がいることで、この大会がいかに重要なものかという再確認ができる」として、延期をプラスに受け止めているように感じられた。
今、高校生ができることとして、青柳さんは「それぞれの文化を確認しながら継承していくこと」と語った。私の住んでいる茨城県には、東京や北海道と比べて魅力が少なくないと感じていた。けれども、茨城ならではの魅力があると思うので、私たち自身もつとめていくことが必要だと感じた。伝統的な祭りなどに参加することで得られるものや感じるものがあるのではないだろうか。

今、高校生ができることとして、青柳さんは「それぞれの文化を確認しながら継承していくこと」と語った。私の住んでいる茨城県には、東京や北海道と比べて魅力が少なくないと感じていた。けれども、茨城ならではの魅力があると思うので、私たち自身もつとめていくことが必要だと感じた。伝統的な祭りなどに参加することで得られるものや感じるものがあるのではないだろうか。



茨城県は ほしいも 生産量日本一!

茨城の特産品は「ほしいも」だ。茨城県はさつまいもの生産量が全国第2位だ。また、ほしいもの生産量は日本一で全国シェア率は9割以上を誇る。

また、茨城県には、「結城紬」と呼ばれる伝統工芸品がある。結城紬は、奈良時代から続く高級織物で、現在は重要無形文化財、経済産業省指定伝統的工

芸品、ユネスコ無形文化財に登録されている。伝承によれば、崇神天皇の時代に多屋命という人物が三野の国から結城に近い常陸国久慈郡に移り住み、織物を始めたという。それが結城地方に伝わり結城紬となったとされる。結城紬はふんわりと軽くあたたかいことに加え、丈夫でシワになりにくいという特徴がある。そのため、着るたびに味わいが増していくので、一生もの着物として大切に着続ける人が多い。

県内でも特にほしいも作りが盛んなひたちなか市でほしいも作りが始まったのは、明治時代といわれている。さつまいもに適した土壌や、冬場に雨が少なく海風の吹く気候風土が乾燥の工程に向いてきたことなどから、全国に誇る特産品へと発展していったと考えられる。また、ほしいものは平干しと丸干しの二種類があり、平干しはストープの上で焼いて食べ、丸干しはそのまま食べてねつとりとした食感を楽しむなど県民は、さまざまなかき方ではほしいもを楽しん



平干し（左）と丸干しの2種類のほしいも
(茨城県観光物産協会「観光いばらき」ホームページより抜粋)

茨城県には、他にも伝統的な特産品や工芸品が数多くあるので、たくさんの方に知ってもらいたい。 (海老澤)

毎日、新型コロナウイルスのニュースばかりでつい悪い方向に考えてしまいがちだ。しかし、新たな発見や考え方も見つかると思う。すべてをマイナスに考えるのではなく、少しでもプラスに考えてみることで、先の見えないこのコロナ禍という状況を、恐れることなく生き抜くことが大切だと思う。 新型コロナウイルスは、東京オリンピックに1年間延期という大きな影響を及ぼした。その影響を悪いと考える人も、良いと考える人もいると思う。しかし私は、大会に出る人も、出ない人も、新たに与えられた1年間という期間で出来ることはたくさんあると思う。まだ知らない日本の文化を見つけて、オリンピックと文化の祭典に関わるのも良いのではないかと。 (海老澤)

編集後記